

あなたがお望みになることを

マルコの福音書 14 章 32-42 節

はじめに

今日から受難週に入ります。次主日のイースターまでの間、イエス様の十字架の苦しみを覚えたいと思います。そこで今日は、イエス様が十字架に架かれる前日の夜、十字架に備えて祈られた姿から教えられたいと思います。

1. 三人の弟子たちに、悩み、悲しみ、恐れる姿を見せられる

イエス様は、弟子たちと最後の晩餐の時を過ごした後、弟子たちと共に賛美の歌を歌いながらオリーブ山に行かれました。そこで、オリーブの油搾りをする「ゲツセマネ」という場所で、イエス様は祈られたのです。

イエス様は、弟子たちにこう言われました。「**わたしが祈っている間、ここに座っていなさい**」。イエス様は弟子たちに、イエス様が祈っている間に見張りをさせたのだと思います。イエス様はまもなく捕えられようとしていたので、それまでの間、誰にも邪魔されずに祈りに集中するために、弟子たちに座って見張りをさせたのでしょう。

それからイエス様は、弟子たちの中でも、ペテロとヤコブとヨハネを祈りの場へと一緒に連れて行かれました。この三人は、イエス様にとって、弟子たちの中でも特別な存在でした。イエス様は、会堂司のヤイロの娘が亡くなった時、この三人だけに、この娘を生き返らせる奇跡を見せられたのです。またイエス様は、山の上で御自身がエリヤとモーセと語り合い、御姿が白く輝いた栄光の姿を、この三人にだけ見せられたのです。

イエス様は、この三人にだけ、御自身の力ある御業と栄光の姿を見せられたのです。そしてイエス様はこのゲツセマネでは、十字架に備えて祈る御自身の姿を、この三人にだけ見せられたのです。

しかしその姿は、今までのイエス様の力強い姿や栄光の姿とは違いました。33-34 節にはこうあります。「**イエスは深く悩み、もだえ始め、彼らに言われた。『わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚めしていなさい』**」。イエス様は、三人の弟子たちの前で、深く悩み、もだえ、死ぬほどの悲しみに襲われていることを隠さずに打ち明けられたのです。これは、今までのイエス様とはまるで違う姿です。

そしてイエス様は、三人の弟子たちから少し離れたところで、「**地面にひれ伏して、できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた**」のです。具体的な祈りの言葉は、36 節に書かれています。「**アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行なわれますよう**

に」。イエス様は、できれば十字架の死を避けたい、できることなら十字架の死から逃れさせてくださいと祈られたのです。

イエス様は、三人の弟子たちに「目を覚ましていなさい」と言われました。「目を覚ましていなさい」ということは、寝ないでイエス様の祈る姿をよく見ていなさいということでもあります。イエス様は、この三人の弟子たちに、御自身が十字架の死を前に、悩み、悲しみ、恐れ、苦しみながら祈る姿を、隠さずに見せられたのです。

2. 私たちの罪に対する神の怒りと裁きの恐ろしさを示すために

イエス様はなぜ、このような御自身の悩み、悲しみ、恐れる姿を、三人の弟子たちに見せられたのでしょうか。その一つは、私たちの罪に対する神様の怒りや裁きの恐ろしさを示すためではないでしょうか。イエス様は、「この杯をわたしから取り去ってください」と言われましたが、「杯」というのは、旧約聖書において、神様の怒りと裁きを象徴する言葉でした。

イエス様の十字架の死は、私たちの罪に対する神様の怒りと裁きを身代わりに受け、神様に対して私たちの罪を償うためのものでした。イエス様は、私たちの罪に対する神様の怒りと裁きを、「これから受ける」という時に、悩み、悲しみ、恐れられたのです。そして、できることなら避けたい、逃れたいと思われたのです。

私たちは、このイエス様の姿を見る時に、どのように思うでしょうか。「神の子なのに恐れるのか」「やっぱりイエス様も所詮、人間なのか」「少しがっかりした」など様々だと思います。しかし私たちは、イエス様のこの姿を他人事のように見るのではなく、私たちの罪との関わりで見なくてはなりません。私たちは、イエス様のこの姿を見る時に、私たちに対する神様の怒りと裁きは、神の子であるイエス様でさえ、悩み、悲しみ、恐れ、できれば避けたい、逃れたいと思うほど、恐ろしいものであるということを知らなければなりません。

私たちは、自分の罪をあまりにも軽く考えているかもしれません。「私はそんなに悪い人間ではない。だから私の罪はそんなに重くない、私に対する神様の怒りや裁きもそんなに恐ろしいものではない」と思うかもしれません。しかしそれは違います。私たちの罪は、どんなに小さなものでも、神の子であるイエス様が十字架で償ってくださらなければ、決して赦されないほど、神様の前には重いものです。私たちの罪に対する神様の怒りと裁きは、神の子であるイエス様でさえ、悩み、悲しみ、恐れ、できれば避けたい、逃れたいと思うほど、恐ろしいものなのです。私たちは自分の罪を軽く考えてはなりません。イエス様が味わった悩み、悲しみ、恐れ、そして十字架の苦しみは、本来、私たちの上に下るべきものだったのです。

神の子であるイエス様は、決して簡単に、軽々と十字架で死なれたものではありません。悩み、悲しみ、恐れながら十字架で死なれたのです。それは、私たちの罪に対する神様の怒りと裁きがあまりにも恐ろしいものであったからです。イエス様は、三人の弟子たち

に、私たちの罪の重さ、そして私たちの罪に対する神様の怒りと裁きの恐ろしさを示すために、御自身の悩み、悲しみ、恐れ、苦しみながら祈る姿を隠さずに見せられたのではないのでしょうか。

3. 自分の望むことではなく、神の望むことを選ぶために

イエス様は三人の弟子たちに、「目を覚ましていなさい」と言われて、少し進んだ所で祈られました。それは、彼らに祈りの模範を示すためでもあったのではないのでしょうか。

イエス様は、悩み、悲しみ、恐れながら、できればこの苦しみや試練を過ぎ去らせてほしい、取り去ってほしいと祈られました。しかしそれでも最終的には、自分が望むことではなく、神様が望むことが行なわれるようにと祈られました。

ヘブル 4：15 には、イエス様についてこのようにあります。「**私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです**」。イエス様は、私たちと同じように試練にあわれました。十字架の死も一つの試練です。しかしイエス様は、試練の中でも決して罪を犯されませんでした。イエス様は十字架の死を前に、悩み、悲しみ、恐れ、できれば避けたい、逃れたいと祈られました。それらのイエス様の祈りは、私たちにとってとても身近なものです。しかしイエス様には罪がなかったのですから、イエス様の祈りにも罪がなかったのです。

私たちは祈りの中で、悩んだり、悲しんだり、恐れたり、苦しみや試練を取り去ってほしい、あるいは神様に従いたくないという祈りをして、必ずしも悪いことではなく、許されていることかもしれません。しかし大切なのは、最終的に、祈りの中で自分を神様の御心に従わせていくことです。自分が望むことではなく、神様が望むことを行なってくださいと祈るようになることです。

イエス様の祈りは、自分の望みに神様を従わせていくものではなく、神様の望みに自分を従わせていくものでした。そのプロセスを弟子たちに見せられたのです。自分の悩み、悲しみ、恐れ、苦しみ、従いたくない思いなどをいくらでも神様に訴えても構わない、しかし最終的に祈りの中で、自分が望むように生きるのではなく、神様が望むように生きる、自分を中心に生きるのではなく、神様を中心に生きて生きる、そのように導かれていくことが大切だということを示すために、イエス様は三人の弟子たちに、「目を覚ましていなさい」と御自身の祈る姿を見せられたのではないのでしょうか。

4. 霊は燃えていても肉は弱い

しかしイエス様の思いとは裏腹に、三人の弟子たちは、イエス様が祈っている間、眠っていたのです。つまりイエス様の祈る姿を見ていなかったのです。イエス様は 37-38 節で、ペテロにこう言われます。「**シモン、眠っているのですか。一時間でも、目を覚ましていなかったのですか。誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです**」。

イエス様は「**誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい**」と言われました。ペテロは、オリーブ山に向かう道の途中で、イエス様にこう言われていました。「**まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います**」(マルコ 14:30)。しかしペテロは、それを否定してこのように言います。「**たとえ、ご一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません**」(マルコ 14:31)。

イエス様は、ゲツセマネの祈りの後、もう間もなくペテロが試練を経験することを知っていました。だからこそ、「目を覚まして祈っていなさい」「わたしの祈る姿をよく見て、あなたも祈りなさい」「あなたも、自分が望むようではなく、神様が望むように生きることができるよう祈って備えなさい」と言われたのです。

しかしペテロは、イエス様の祈る姿を見ることもなく、また自分で祈ることもなく眠っていました。その結果、ペテロは数時間後に誘惑に陥り、イエス様を知らないと言った三度も言い、イエス様を裏切ってしまうのです。

イエス様は「**霊は燃えていても肉は弱いのです**」と言われました。私たちは、順風満帆な時は、自分を過信します。しかし、いざ試練の時や苦しみの時には、自分の弱さが出るのです。ペテロも順風満帆な時は「**自分は大丈夫**」と信じていました。しかし、いざ試練に襲われると、あまりにも弱い自分の姿を見て泣き崩れるのです。

私たちは、自分が思っている以上に弱いのかも知れません。私たちの強さや弱さは、順風満帆な時には分からず、いざ試練の時や苦しみの時にこそ、私たちの強さや弱さは現れるのではないのでしょうか。

イエス様は、いざ試練の時や苦しみの時にこそ強くいられるように、「目を覚まして祈っていなさい」と言われたのです。私たちは、自分が思っている以上に弱いのです。だからこそ、イエス様の祈る姿をよく目に焼き付けて、自分も祈らなければならないのです。

おわりに

イエス様は、悩み、悲しみ、恐れ、できればこの苦しみや試練を過ぎ去らせてほしい、取り去ってほしいと祈り、それでも自分が望むことではなく、神様の望むことが行なわれるようにと祈る姿を、私たちに隠さずに見せられました。それは、私たちの罪の重さ、私たちの罪に対する神様の怒りと裁きがいかに恐ろしいものであるかを示すためでした。イエス様は、私たちの身代わりに、それらを十字架で引き受けてくださったのです。

それは決して簡単なことではありませんでした。悩み、悲しみ、恐れ、苦しみながら、自分を神様の御心に従わせていかれたのです。私たちも、たくさん悩み、悲しみ、恐れ、苦しみますけれど、最終的に、自分が望むことよりも神様が望むことを選び取っていかねばなりません。

そのために、「目を覚まして祈っていなさい」とイエス様は言われます。私たちは、自分を過信してはなりません。私たちは自分が思っている以上に弱いのです。私たちにいつ試練や苦しみが襲ってくるか分かりません。その時の強さは、祈りによって与えられるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、あなたを愛さず、隣人を自分のように愛さず、自分ばかりを愛し、自分の望むことばかりを求めて生きてきました。私たちの歩みは、あなたが求めているような歩みとは、ほど遠く、私たちの罪はあなたの御前にあまりにも大きなものです。そのことをイエス様のゲツセマネの祈りは教えてくださいました。イエス様が、祈りの中で自分を神様に従わせ、私たちに対する神様の怒りと裁きを身代わりに受け、神様に対する私たちの罪をすべて償ってくださったことを感謝します。

どうか私たちが、自分の罪を過小評価し、自分の信仰を過信して、あなたの御前に眠ってしまうことのないように。イエス様の祈りの姿をよく目に焼き付け、祈りの中で自分を神様の御心に従わせていくことができますように。そしていざ試練や苦しみの時に、信仰を全うしていくことができますように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。アーメン。